



医療安全コラム

～高齢者の転倒による骨折のリスクを減らすために整形外科医ができること～



廣村 健太郎 医師

整形外科 准教授 廣村 健太郎

インシデントレポートとして報告される事故のひとつに、院内での転倒転落があります。多くは比較的軽微な傷害にとどまりますが、なかには骨折や頭部外傷を受傷し手術に至るケースがあり、治療中の疾病の予後に大きく影響することもあるため、当院に限らず、どの施設においても院内転倒の予防や対策は重要な課題となっています。院内における転倒事故が減少しない背景として、急速な高齢人口の増加に伴う入院患者の高齢化が大きく影響しています。高齢者の転倒転落リスクは内的要因、外的要因ともに様々な要因があり、身体機能の状況からも必然的にリスクは高くなります。入院中にそれぞれすべての要因に対して安全を損なわないように配慮することはかなり大変です。もちろん防ぎようのない事故も存在すると思いますが、“やるべきことをやっていれば防げる事故”も多く存在すると思います。過言かもしれませんが、整形外科医として“やるべきこと”の一つに、骨粗鬆症治療があげられると思います。強い骨づくりも、転倒、骨折リスクを下げる一因になります。高齢者の骨折は、骨粗鬆症を基盤とする脆弱性骨折がほとんどで、予防するには骨粗鬆症治療の介入とその継続が鍵となりますが、国内において骨粗鬆症の治療率は約2割前後と非常に低水準なのが現状です。実際、治療率の向上や治療継続の維持は医師だけの力では困難なため、最近では、多職種の協力を仰ぎながら治療率や治療継続率を向上させている報告も多くなってきました。もちろん治療のきっかけは整形外科医の役目だと思っています。当院でも骨粗鬆症治療率の上昇や継続の維持に努め、たとえ高齢者が院内で転倒しても骨折などの重大な事故につながらないように、皆さんで協力していきましょう。

第22回富山県公的病院医療安全研究大会

令和4年6月25日(土)13時から17時まで、アイザック小杉文化ホール ラポールにて、第22回富山県公的病院医療安全研究大会が、新型コロナウイルス感染防止対策に配慮しつつ開催されました。

当院からは、一般演題として、中央臨床検査部の古川夏美主任臨床検査技師が「COVID-19検査の検体再採取防止に対する取り組み」のテーマで発表しました。その他一般演題はセッション1から4までの20演題が発表され、どの発表も医療安全に取り組む姿勢が見受けられ、当院でも参考になるような内容ばかりでした。

特別講演として、「モンスターペイシエント、ペイシエントハラメントといった困難を伴う患者対応について」と題して、澤田法律事務所の太田悠史弁護士が講演されました。

昨今はどの医療機関も頭を悩まされる問題であり、会場は熱心に聞き入っていました。



回覧												

令和4年度 第1回 医療安全研修会

令和4年7月8日（金）17時30分から18時40分まで、本年度第1回医療安全研修会が6階多目的ホールで開催されました。

当日は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、参加者を事前に50名程度に制限して、開催されました。また、今回は医療安全委員会と医療ガス管理委員会との共催となりました。



携帯用酸素ポンペを用いて説明する金盛克美係長

演題①は、サカキ産業株式会社高岡支店ガス課 金盛克美係長による「医療ガスの正しい取り扱いについて」で、在宅酸素療法についての講習をメインに、酸素の基本的性質や事故例、ヒヤリハット等について講義いただきました。在宅酸素療法は、院内でもカート式の携帯用酸素ポンペ持参で受診されている患者さんを見かけることもあり、身近なものになってきていますが、酸素は可燃性（助燃性）の性質を持つため、火気厳禁であり、高圧ガス保安法で40℃以下に保つことが定められており、炎天下の車内等に放置することは大変危険であることを学ぶことができました。また、在宅酸素療法を受ける患者さんの自宅には酸素濃縮装置を設置しており、2メートル以内は喫煙・火気厳禁であり、さらにIHや電気ストーブなどの熱源になりうるものにも注意することが必要であるとの説明を受けました。



講師の竹越智久主任

さらに、過去にあった事故の事例として、酸素ガスと炭酸ガスとの取り違いなどについても説明されました。また、アウトレット（パイピング）とポンペの識別色に関しては、再確認できてよかったとの声もありました。実物の機器を会場にお持ちいただき、カートの運搬方法など実演しながら説明され、わかりやすい講演でした。

演題②は、当院の中央放射線部 診療放射線技師の竹越智久主任による「安全な臨床MRI運用について」で、MRI検査を取り巻く環境や検査の特徴、危険性などについて講演いただきました。

MRI検査は強力な磁石でできた装置の中で磁力と電波を使ってからだの内部を画像化する検査ですが、吸着事故等が起こる可能性があることが説明されました。令和3年に韓国で実際にあったMRI検査機器に突然金属製の酸素ポンペが吸い込まれ、ポンペに挟まれた患者が死亡するという医療事故についても紹介されました。また、検査中に電磁波が発生するため入れ墨やアートメイク、マスカラ等でも金属を含むものは、やけどの危険性があることも再確認しました。さらに、機能性肌着やマスク、増毛パウダーやUVケア化粧品にいたるまでの危険性が説明され、驚きの声があがっていました。放射線被曝もなく、脳梗塞等の診断が可能であり、非常に有用な検査機器ではあるが、一歩間違えると事故につながるということが理解でき、有意義であったとの声が多く聞かれました。